


## 山 行 報 告 書

山行報告者：加 藤

山 域・山 名： 八 海 山 (入道岳) (1788m)		(新潟県南魚沼市)
入山日又は期間： 平成 30 年 8 月 21 日(火)～23 日(木) (1 泊 2 日)		
参 加 者	加 藤 1 名	
天候 両日共に快晴		
8 月 21 日 (火)	12:40 南浦和駅～12:50 大宮駅着、13:06 新潟行の新幹線～14:00 越後湯沢駅着、14:14 上越線長岡行に乗り換え～14:35 六日町駅着、14:50 六日町駅始発の八海山スキー場行のバスに乗車、15:18 スキー場着、15:20 発のロープウェイ乗車、15:30 山頂駅に到着、登山開始～16:30 女人堂着。トイレ休憩～17:30 八海山避難小屋着、夕食他登山者と歓談、20:00 避難小屋にて就寝	
8 月 22 日 (水)	3:30 起床、準備、朝食～5:00 避難小屋出発～6:20 八つ峰を経て入道岳到着～8:00 避難小屋に戻る、ザック回収、8:45 小屋から下山開始～9:30 女人堂通過～10:30 ロープウェイ駅、トイレ休憩～11:30 霊泉小屋通過、水補給～13:00 龍谷寺前バス停到着、休憩～13:34 浦佐駅行のバスに乗る～14:12 浦佐駅から新潟行の新幹線に乗車、秋田へ帰省	
装 備 と 食 糧	個人装備：ヘッドランプ、雨具、防寒衣、コンパス、地図、ヘルメット、サブザック、グローブ、シュラフ、シュラフカバー、マット、コッヘル、コンロ、カートリッジ、着替え、衛生用具、携帯電話、ラジオ 個人食：21 日(夕)、22 日(朝)、行動食、非常食	
感 想 & 要 注 意 事 項	<p>前日、当初は女人堂に前泊の予定だったが、日がまだ持ちそうだったので一気に避難小屋まで登った。今回は完全に時間差登山で、人が下りてくる時分に登り、まだ誰も山に来ない時分に山頂を往復した。</p> <p>こんな計画を立てたのは、ここが危険な山域であると十分理解したうえで、できれば鎖場などで後ろからせつかけたりすることなく、足先指先に集中したかったからだ。避難小屋で出会った地元の青年二人は、翌朝山頂へは行かず下山したので、早朝の八つ峰～入道岳の往復は、完全に単独となった。夜明けを待って出発。</p> <p>八つ峰は、垂直の岩を鎖を手繰ってよじ登り、狭いピークで地蔵様やら諸々の神様を拜んで数歩行くと、いきなり足元が切れ落ちて先の見えない鎖が一本垂らされているのだった。</p>	

丸っこい石が埋まったぼこぼこした岩肌で、たまに、足を乗せたそばから石が剥がれ落ちた。自然、腕にかかる比重が大きくなっていて、だんだん腕の疲労が増していった。ホームセンターで購入した 300 円のゴム付き手袋に私の命がかかっていた。これでは復路で落ちると危惧し、途中から意識して腕よりも足に比重をかけて上り下りするようにした。八つ峰を無事越え、大日岳・入道岳と進む。

両足を揃えたくらいの幅しかないザレた道は、片側はやぶの覆い茂る山肌、もう片側は低草木にカモフラージュされているが、目もくらむような谷底まで切れ落ちた崖だった。絶対に転ぶなと自分に言い聞かせながら、常に山側の草や枝をつかみながら慎重に進んだ。

そうして見えてきたのは、入道岳の更に先から中ノ岳へと続く空中回廊のような美しい縦走路だった。繊細な畝と巖とが徐々に高度を増して、御月山や中ノ岳の巨大な黒い塊に飲み込まれていく様は、朝日の光線の演出も相まってまるで一つの物語を見ているようだった。恐怖に近い感動だった。

3 時間後、無事に避難小屋へ帰り着いたとき、思わずガッツポーズと雄叫びが出た。よくやったホントよくやったとぶつぶつ言いながらザックを回収、そしてそこから炎天下の中のさらに過酷な 4 時間に及ぶ下山が待っているとは夢にも思わず、「サクッと」下山開始。

大崎口コースはところどころに梯子や鎖が設置され、気の抜けない長い長い下りだった。無風でとにかく暑く、途中の金剛霊泉なる名水で水を補給しながら、おそらく 3ℓ 以上水を飲んだと思う。この水はしみじみありがたかった。

キーホルダーの温度計は 40℃。ふもとのバス停までついに誰にも会わず、陽炎の立つアスファルトの道をトボトボ歩いてバス時間までには着くことができた。

30 分後、浦佐駅行のバスに乗車。今回はそのまま浦佐駅から新潟へ出て在来線に乗り換え、秋田へ帰省した。

帰省客に交じって電車の窓の外を眺めていると、この日の早朝の自分の闘志や見た景色などが思い出されて、何か現実ではない体験をしたような不思議な感覚だった。帰省途中の山行も初めてなら、山から下りた電車の中でおもむろに缶ビールを開けたのも（しかも一人で）今回が初めてだった。疲れているのに、興奮して神経が休まらなかったんだろう。

山頂の向こうの荘厳な景色も、体が煮えるような下りの歩きも、すべて強烈な体験だった。小屋で会った二人、純朴な地元の人たち、そして八海山の山の神様に心から感謝…！